

第2期 国分寺市公民館運営審議会 平成30年度第8回定例会 要点記録

日 時 平成30年5月21日（月） 午後4時～午後6時

場 所 本多公民館2階講座室

出席者

■委 員 佐藤（一）委員長・田中（英）副委員長・木下委員・長谷部委員・高塚委員・萩原委員・戸澤委員・藤原委員・松井委員・大内委員・田中（雅）委員（欠席：1名）

■職 員 山崎公民館課長兼本多公民館長・野中恋ヶ窪公民館長・久保光公民館長・豊泉もとまち公民館長・本望並木公民館長・増本本多公民館事業係長・木場本多公民館事業係

■傍聴者 7名

委嘱状伝達

1 連絡事項

- （1）配布資料確認
- （2）第7回定例会要点記録確認⇒承認

2 報告事項

- （1）平成30年国分寺市教育委員会第4回定例会について
事務局：資料1に基づき説明。
- （2）平成30年国分寺市議会閉会中文教子ども委員会について
事務局：資料2に基づき説明。

3 協議事項

- （1）諮問：国分寺のまちを学び共に創りだす公民館活動の今後について
委員長：5館の館長より「国分寺のまちを学び共に創りだす公民館活動の今後について」という諮問をいただいた。第1期国分寺市公民館運営審議会の答申「地域づくりを目指した公民館のあり方」には国分寺市の公民館が果たしてきた役割についてわかりやすく記してある。50年の総括と公民館の意義は確認されたが、さらに一步進めていくためにはどうしたらいいか。みなさんと問題意識を話し合い、杉並区の「大人塾」の取り組みを視察してきた。新しい地域づくりを踏まえた公民館のあり方についてどう考えていくか。各館での展開もあるし、国分寺市全体を見ることもある。したいと思っけていてもできない点、停滞している点、あるいは大事な活動なのでさらに発展させていこうということもある。何回かフリートーキングをしていく中で出てきたのが、国分寺市の公民館は利用率が高いが、それは固定された利用層ではないか、

公民館を知らない、利用したこともない、ずっと企業人・ビジネスマンとして活躍してきた人が、定年退職して地域に戻り「地域デビュー」した際に上手くいくのかという問題意識。大量の定年者を地域で迎える時代。一方で、答申の中にもあった国分寺市は自然豊かな地域、野川や都市農業が残っているフィールド。国分寺市の歴史・自然・文化・環境を活かした学びを、子どもたちに伝える循環が起きている。各館によって状況は違うが、未利用者を視野に入れた広がりや、活動のあり方に意義がある。全国的な展開としては、NHK の特集『縮小日本』にもあったが、東京の縮小、生産人口・労働世代の縮小が進んでいて、将来的には 2050 年に生産人口が 3500 万人に減る。それを補うために外国人労働者を入れている。地方では外国人を呼び込むために勧誘する施策を進めている。国分寺市は外国人の問題をあまり意識してはいないが、埼玉県の蕨市や川口市では小学生の 1 割が外国人であり、教員にとってはたいへんな状況。東京都内でも大久保周辺の小学校の児童は 4 割ほどが外国籍という特殊な地域もあり、外国人との共生がテーマになってくる。オリンピック・パラリンピックの基盤整備として労働力が求められている状況もある。国分寺市の場合は高齢化が進んでいる。社会福祉が地域福祉として取り組む問題と公民館の連携も必要である。西東京市など公民館と社会福祉協議会が密接に連携している地域もある。地域の資源を活かした地域づくり、将来まちが変わっていく中で、公民館がこういった役割を担っているのか、またどのような人づくりが求められていくのか。ボランティア活動を含めて、まちづくりとの関係が問われている厳しい時代だ。答申から見えてきたとおり、国分寺市の公民館はまちをつくってきた歴史がある。次の一歩として、変わりゆく地域社会の中で、それぞれの公民館が可能性を開いていけるような提案・答申をまとめていきたい。あと 1 年しかないので協議を絞り込む必要がある。そこで 3 つのグループ分けを提案したい。国分寺市の公民館では、子育て中のお母さんたちが核となった活動がある。また、もっと公民館に参加してほしい世代として定年退職者（50 代以上）がある。それぞれの世代が、有意義な活動を広げていくためにできる地域参加・地域デビューのあり方についてのテーマ。子どもや青年たちによる異世代交流を中心としたテーマ。社会の一員としての意識が持てない子どもが増えている。進路についての悩みや孤独感、生きがいの創出、つながりの形など福祉的な課題も含めて議論してはどうか。加えて地域でのネットワークづくり。公民館まつりなど、地域での行事活動をとおして、各館が地域で行いたい取り組みなど。今日はこのグループ分けについての意見を伺い、次回はそれぞれの問題意識を出し合い、それ以降はグループごとに集まり、秋以降に事例や提案を持ち寄りまとめ作業に入り、12 月あたりから文書作成。1 グループごとに 5 ページ程度、各館の公民館運営サポート会議で 2 頁の内容でトータル 20 頁の答申のイメージ。前後には「はじめに」と「おわりに」を入れて、全国レベルの諸課題に触れたいと考えている。今までの議論と視察をとおして見てき

たことを踏まえ、作業をしていきたいが、意見をいただきたい。今日はグループ分けや日程調整までできたらいいと考えている。

委員：各公民館から代表が出ているのが公民館運営審議会。これをさらに分けると、公民館からの発信ばかりになるのではないか。社会福祉協議会の思いなどリンクしないのではないか。公民館運営審議会はいろいろな立場の委員がいろいろ言える場ではないか。

委員長：テーマ1と2はいろいろな立場から意見が言える。

委員：委員長の意見が難しくてよくわからないので、委員長が講演した昭島市公民館の資料を見た。委員長の言わんとしていることがわからない中、どんどん提案されてもついていくのがたいへん。日本中のことを言われても困る。不安になる。私たちの足元でできることを議論したい。

委員：今日のテーマはこれまでの議論を踏まえて出てきたもの。

委員：1期目からいる委員はわかっても、2期目からの委員にはこれを読んでもよくわからない。

委員：2期目も随分話し合いをしてきた。公民館からだけでなく、3つのテーマに合わせてそれぞれの立場から発言して議論していけばいいのではないか。

委員：諮問には「国分寺のまちを学び～」とあるが、委員長からの3つのグループ分けの提案を議論するとすると、これでいいのかということ。これありきで議論すると諮問のテーマが絞られてしまう。そこで事務局に質問したい。この諮問のテーマは「だれが」学ぶのか。公民館運営審議会の委員か、利用者なのか、地域の市民なのか。そこをまず定めていただかないと範囲が広すぎて対応できない。

事務局：公民館を利用している方々、市民である。

委員：ならば、利用者だけではなく、市民の声を聴かなければならない。

事務局：未利用者が今後公民館を利用していくためにどういうテーマがあるのか、諮問させていただいた。

委員：利用者は継続して利用している訳だから、未利用者、つまり外に向けて発信することになる。いかにして情報を得、どうするのか。3つのテーマは2期目の委員が疑問を感じて当然ではないか。

委員：テーマ別は悪いとは思ってはいない。いずれやらなくてはならないこと。ただ、諮問に対していきなり出ているので。

委員：この3つのテーマはすでに各公民館で行われている事業。公民館運営サポート会議でも話が出ている。

委員長：それらを踏まえて委員のみなさんは発言してきたはず。国分寺市の公民館は利用率も高いし、グループ活動も活発である。前回の答申から次への打ち出しが、この総合的なタイトルではないか。みなさんの発言を受けて提案させていただいた。

委員：荷が重い。自分としては2かなと思う。事例がないと課題や解決策が見えない。この事例とは公民館の事業なのか、市内全体の取り組みから抽出するも

のか。

委員長：それも合わせて委員のみなさんにご議論いただきたい。委員の持っている情報やネットワークを活用していただきたい。

委員：最終的には子どものことを書くにしても保護者の活動も含めてとなるのか。

委員長：もちろん。含まれる。

委員：公民館運営サポート会議の委員でもある私にとっても荷が重い。全て集約できないので、自分ができること、興味があることから着手して、公民館が実践的にできるきっかけづくりになればいいのではないかと。一歩進めればいいという感覚。3つのテーマからすると1か2になる。あとは議論の中で深めていければいいと思う。

委員長：国分寺市の公民館運営審議会は定例会の回数も多いし、委員の皆さんの活動も多岐にわたっている。その情報量も合わせれば十分審議できると考える。通常、公民館運営審議会の答申は学識者と事務局で作成するのが一般的。国分寺市は違う。みなさんがデータや経験を持ち寄り、文書も書いて作成したことに本当に驚いた。

委員：委員自らが答申を書いたことは本当に素晴らしい。提案以前に、公民館の利用者の立場から、この50年間の振り返り・歴史を書くことはなかなかできないこと。世代を超えたつながりがあるからだと思う。2期目からの委員は不安かもしれないが、ゼロからのスタートをグループの中で協議してはどうか。

委員：テーマの選択には悩むが、私自身、わが子を保育室に預けて以来、PTAの活動や地域に広がっていった。社会全体との女性の絡みが気になる。

委員：異世代交流事業で「紙飛行機を飛ばす」取り組みがある。当時参加者だった子どもたちが、今は大学生になり、スタッフとしてつながってくれていて、みんなの喜びになっている。

委員長：すばらしいこと。例えば、農業体験は国分寺市らしいテーマとして両方で取り上げてもらってもいい。

委員：並木公民館でも「子ども農業体験講座」でお世話になった人が、地域の担い手になってくれている。公民館で活動していればしているほど問題点が出てくる。働く年齢が高くなっていること。働いた後のリタイヤ、地域に帰る時に新しく参加してくれる人をいかに探すか。それがそれぞれのグループに課せられた役割ではないか。もう一つ、「農業体験講座」を通して感じることは、学校や地域との関わりがなかなか長続きしないこと。利用者だけでなく、組織として動くことも必要ではないかと思う。先ほど、運用と事業の両面での意見と言われたが、具体的に考える必要があるのか抽象論で留めてよいのか。

委員長：例えば情報発信。これはどう改善できるか。未利用者に届かなければ意味がない。こうすればいいのではないかとという広がりを書ければよいと思う。事業のあり方への提言もある。努力目標。館長にも一緒に考えてもらいたい。

委員：公民館は頑張っていると思う。恋ヶ窪公民館の「赤米」の事業は議会でも取り上げられている。一方、公共施設の新しい予約システムでは、予約できな

くなったらどうしようという市民の不安もある。これまで未利用者のことが取り上げられているが、今の国分寺市の現状がどうなっているのかももう一度しっかり分析してほしい。市民全員が利用する必要があるのか。図書館の利用率が高いのはわかっている。もっと数値での分析を求めたい。来ない人が来るようにすればいいのか。基盤固めが先決だと思う。公民館運営サポート会議ではリアルな数字を求められているが、公民館運営審議会は情緒的な内容が多い。もっと利用者の満足度をあげる視点も必要ではないか。

委員長：毎年調査はしていても、人口比で見た具体的な未利用者の数字はない。小平市の事例としては、公民館の利用者人口は全人口の2割だった。図書館の利用者人口は4割5割と高かった。実感として7割の稼働率が高い。

委員：利用している立場からすると、人口比の利用者人数など関係ない。利用団体の構成員が減っている現状の方が大きな問題ではないか。人がいない。その具体的な提言や情報発信の仕方が必要だと思う。

委員長：人数だけではない。人生が変わるような出会いや、いきいきとした体験が公民館で得られるかということが重要である。

委員：公民館を利用して、他機関が絡む場合の取りまとめやコントロールはどこが担うのか。そこを考えることがスムーズなのではないか。

委員：今活動している団体の拡張は難しいことではない。公民館に何をしてほしいか。求められていることをみつけること。現状は意味がない。新しいことはなにかが重要。どういう地域や団体と関係し連携することが必要か。

委員長：それを考えるためのヒントが未利用者なのではないか。新しいスタイルへの提案ができたらいと思う。

委員：そこを考えることが難しい。まずは発信する方法、WebやSNSなどシステムを考えていかなければいけない。

委員：PTA 連合会や保育園保護者会連合会、学童のPTAもしてきた。今の社会で、会を存続させることがたいへんになっている。そういうことを続けていくと存続することが目的化してしまって、学ぶ機会が減ってしまう。そこになんとか公民館の力を借りてできないかと思う。学習の時は、公民館と連携すればいいという企画のノウハウなどを提供してほしい。

委員：校長先生や学校の先生と話していると、そういう意見をよく耳にする。光公民館では登録制の人材バンクが立ち上がった。学校にアピールすることもある。そういうことを全館で行ってはどうか。

委員：恋ヶ窪公民館では公民館運営サポート会議に五小や九小の校長先生も参加してくれている。公民館と学校は実際につながっている。すでに関係が構築されている。

委員：公民館運営サポート会議はもっと連携をし、公民館事業に集約すべきではないかと思う。公民館運営審議会が公民館運営サポート会議の委員に負担をかけてはいけない。公民館運営審議会の中で解決できる問題に課題を絞るべきではないか。でないと、中途半端になる。

委員：真逆の言い方になるが、以前より公民館運営サポート会議の役割が増すのではないか。並木公民館の場合、利用者団体から参加している公民館運営サポート会議の委員が半数いる。団体同士で公民館のことを議論しているといろいろな意見が出てくる。「公民館運営サポート会議だより」も作っている。いろいろなところに声をかけて、点の情報がつながれば線ができる。線ができれば面ができる。例えば3年計画でお雛子を始める予定。六小の校長先生も熱心で、六小と公民館運営サポート会議と公民館がつながる可能性もある。

「農業体験講座」の講師が笛の名手だったりする。答申の中でこの取り組みを書きたいと思っている。各館の公民館運営サポート会議や地域会議から小さな芽が出てくる予感がする。地元の組織などみんなの力を合わせていく。

委員：なぜ5館にあった公民館運営審議会が一つになって、各館に公民館運営サポート会議ができたのか。それはそれぞれの地域性を活かしていく形で、地域とつながっていくため。5つの異なる地域性を一つにするのは無理。だから、公民館運営サポート会議は地域に根づいた活動や地域に密着した活動を行い、公民館運営審議会は市全体の方向性を決める組織に位置づけるべきである。もっと大きな大局的なところで審議していくべきではないか。

委員：改めて諮問を読み直した。第1期の答申を読んで、公民館運営審議会の委員として意見を出せばいいと思う。館によって地域性があるので、5館の違いは当たり前。住民主体で地域課題をアウトリーチしながら解決していこうとうたわれている。その課題解決の場の一つが公民館ではないか。そこで重要なのが地域のキーパーソン。その地域の課題を抽出して解決していくためのキーパーソンは、公民館運営サポート会議の委員ではないかと思う。その委員から公民館運営審議会にいろいろな意見があがってくるイメージ。この場では、その立場からの意見をどう集約して答申に盛り込むかであって、この3つのテーマに対して意見を出せばいいのではないか。

委員：やっと元に戻った感がある。3つのテーマでよいのであれば、グループ分けをしたい。3つのテーマはとても大きい。それをこの1年間で3つ同時にできるのかどうかも合わせて議論してほしい。広げすぎたら何人委員がいても終わらないと思う。

委員長：前回の答申が総括的な内容になったので、事務局と相談して特徴的なところに絞り込んだ。とてもあと1年で3つできないという皆さんのご意見が多数であれば絞ることもあり得るかとも考える。

委員：委員長と事務局で打ち合わせは当然だが、テーマは公民館サイドから出していると考えてよいのか。

事務局：第1期の答申でいただいた議論を踏まえ、第2期の諮問になった。課題の整理を正副委員長と意見交換し、5館の館長から諮問した。

委員長：第1期の答申や、すでに国分寺市の公民館で実施している事業を踏まえた趣旨になっている。

委員：第1期は地域を重点に掘り下げた課題や問題提起だった。それを踏まえて、

さらに深く掘り下げて連携させる具体的なものと理解した。

委員：2期目から委員に参加した自分としては、3つのテーマの内2番目に関心がある。後継者不在の問題は今さらかと思う。そのためにはもっと公民館に親しんだ子どもを育成していく必要がある。公民館の事業も多種多様でよくやっている。いろいろな事業をもっと表にだせるように展開するべき。私がここに参加したのは「国分寺カルタ」を作りたいため。定年退職後、学童クラブで働きながら、どうすればカルタができるか思案している。カルタを通じて市の協力を得ながら、市民に国分寺市を見直してほしいと思っている。

委員長：「葛飾郷土カルタ」はすごい規模で行われている。

委員：学校への関心の高さに感謝している。紙飛行機もカルタも農業体験もどんどん一緒にしていきたい。コミュニティ・スクールの維持やコーディネーターや連携に苦慮している。予算も少ない。だからこそ公民館の力や委員の力添えをいただきたい。維持存続の形は教員の異動等もあるので難しい。

委員：子どもを介するといろいろ派生する。子どもを核とした力はすごいものがある。中学生の力も素晴らしい。

委員長：大学生まで視野にいれてほしい。お兄ちゃんお姉ちゃんの姿が見えると刺激を受ける。高校生のボランティアも加えて小学生から大学生までを範囲に入れてほしい。

委員：大事なことは継続。どこの会合に行っても同じ人が出てきているのが実態。それをどう広げられるか。個人的なつながりなのか。継続の形をどうするか。

委員長：新しい出会いをとおしての活力があるかどうか継続につながる。それがないと義務感になってしまう。

委員：今の世の中、元気な人しか出て来ない以上、同じ人になってしまう。地域の担い手がいない。だからこそ子どもに来てもらう必要がある。事業も子ども対象にしたものを広げてほしい。

委員：子どもが事業に出てくれば保護者もついてくる。参加してくれる。

委員長：1のテーマは2のテーマも噛み合わせている。子どもをキーワードにするかどうか。

委員：先日聞いてみたら、子どもたちは全く公民館に興味がない。

委員：だから外でやればいい。何も公民館の中でやる必要はない。

委員長：年齢で区切る必要はないと思う。例えば「お父さん」は1でも2でも議論していい。後からまとめの作業で集約していくのはどうか。ではそろそろグループ分けをしたい。分かれて議論して整理していきたい。

委員：3つめの意見はなくせないのか。公民館運営サポート会議はそれぞれ異なる。提案しても丁寧に議論する時間がない。

委員長：本来、各館に公民館運営審議会があつて公民館を動かしていくべきところなのに、国分寺市は一つにまとめた以上、5館の公民館運営サポート会議の委員の声を集約していく必要があると思う。

委員：逆に一つになった意義を考えていくべきだと思う。公民館運営審議会は市全

体を見ていくものであり、仕組みが変わった以上、公民館運営サポート会議は各館の特色を踏まえて一歩ひいて公民館の楽しさを伝え、館長のサポートをしていくべきものだと思う。

委員：公民館運営審議会と公民館運営サポート会議は両輪だと思う。それぞれできる範囲の検討をすればよい。公民館運営審議会と公民館運営サポート会議は上下関係ではない。

委員：第2期からの参加としては、最初、公民館運営審議会と公民館運営サポート会議の役割分担がよくわからなかったが、答申を読んで、公民館運営サポート会議の大切さがよくわかった。

委員：前回の諮問はテーマがちょうどよく、公民館運営サポート会議も協力体制を取ったが、諮問のたびに毎回というものではない。各館の公民館運営サポート会議で委員がすることはたくさんある。杉並区の「大人塾」を視察していろいろヒントをもらった。予算のことも参考になった。地域としての人の育成をどうするのか、いろいろなテーマを出して検討して取り組みたい。それこそ地域活動になる。そうすると公民館運営審議会のテーマは、いつ時間を割いて取り組めるのか心配である。

委員長：委員の負担が大きくなるかもしれないが、各館、地区のレベルの取り組みをまとめるにあたり、館長や委員と意見交換して出してもらいたい。

委員：提言と言われると責任を感じて重い。

委員長：提言と言っても2頁程度。組織としての責任ではなく、地域の特徴に触れる程度と思ってほしい。とりあえずスタートさせてほしい。

委員：公民館運営審議会と公民館運営サポート会議両方やる人は何人いるのか。

委員長：5人いる。では活発に意見もいただいた。そろそろグループ分けをしたい。

1のグループは、田中（英）委員、佐藤（敏）委員、長谷部委員、大内委員、戸澤委員。2のグループが松井委員、木下委員、藤原委員、萩原委員、高塚委員。次回はそれぞれの問題意識を持ち寄る形になる。

4 その他

委員長：次回の審議会の日程は、6月25日月曜日午後2時から4時。グループワークでフリー討論とする。その後の日程はどうか。

事務局：ワーキンググループの調整もあると思う。

委員長：7月は各グループで独自作業をし、全体の審議会は9月にしてはどうか。

では9月10日月曜日午後3時30分から5時30分とする。以上で第8回定例会を終了する。